

方形貼石墓概論

肥後弘幸

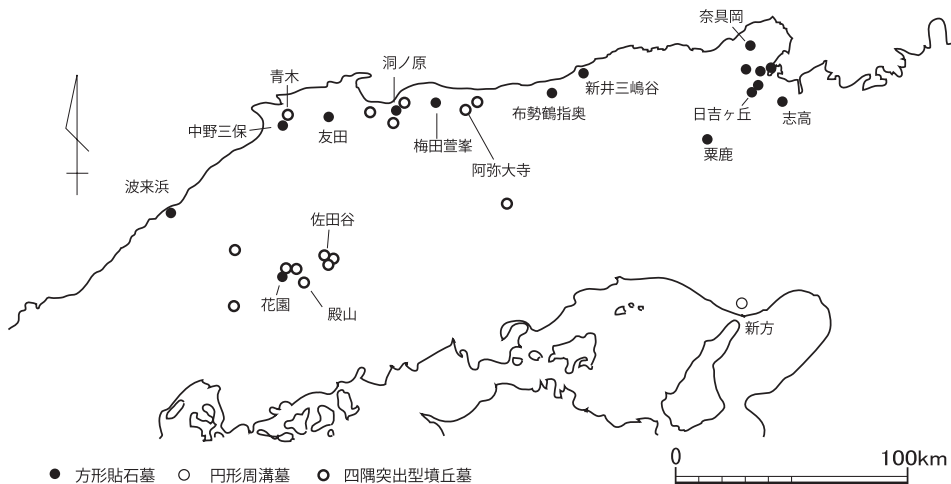
1. はじめに

弥生時代中期から後期の近畿地方から中国地方かけて、古墳の葺石のように墳墓の墳丘斜面に石を貼って墳丘を荘厳化した墳墓が存在する。そのうち方形の墳丘に貼石を持つものが、後期に四隅突出型墳丘墓が発達する島根県～鳥取県西部の地域と、広島県北部の地域以外に、鳥取県東部及び京都府北部から兵庫県北部の地域(以下近畿北部と呼ぶ)に分布する。また、方形のものとの関係は定かではないが、兵庫県東南部(西摂津)には円形周溝墓の墳丘斜面に貼石を持つものが中期前葉から後期にかけて数例知られている。

本稿では、中期から後期前葉に時期を限定し、近畿北部の方形貼石墓を中心に、広く四隅突出型墳丘墓を含む方形の貼石墓を概観し、その実態に迫りたい(第1図)。

近畿北部ではじめて方形貼石墓が認識されたのは、1986年の舞鶴市志高遺跡の発掘調査である。古墳時代前期の包含層を除去した面で一列の貼石と石組遺構を検出し、墳丘上および墳丘内の土坑から意図的に一部を欠いた土器群が出土した。精査した結果、貼石をもつ墳丘が3基検出され、その内の1基からは木棺痕跡を伴う埋葬施設が検出され墳墓遺構であることが確認された。この時点で、1983年に調査された弥生時代中期の京丹後市小池13号墓も丘陵上に立地するものの同様の貼石墓であると認識された。加えて、1985年京丹後市奈具岡遺跡でみつかった中世と推定された貼石遺構は、志高遺跡の2号墓との類似性が高く同様の墳墓であることが推定された。このように志高遺跡の調査をきっかけに、弥生時代の丹後地域に墳丘斜面に石を貼った墓制が存在することが明らかになった。続いて1987年には、与謝野町寺岡遺跡、同千原遺跡で相次いで中期の方形貼石墓の可能性のある遺構が検出された。その後、1999年に与謝野町日吉ヶ丘遺跡で大型の貼石墓が検出され、近畿北部を代表する弥生時代中期の墳墓として地元自治体の努力により保存が図られ、2005年に国史跡となっている。2001年には兵庫県朝来市山東町栗鹿遺跡でも1基検出されその分布域は広がり、2006年には古代から中世にかけて港湾都市として栄える宮津市府中の難波野遺跡から2基の方形貼石墓が検出された。現在、近畿北部での方形貼石墓は、8遺跡13例となっている(付表1)。

これらの墳墓については、報告書で幾つかの名称で表記されている。小池13号墓は、丘



第1図 弥生時代中期～後期前葉の貼石を持つ墳墓の分布

陵斜面に立地することから台状墓と報告され、志高遺跡では貼石墓と記され、寺岡遺跡では貼石を伴う方形周溝墓と報告されている。日吉ヶ丘遺跡、難波野遺跡、粟鹿遺跡では方形貼石墓と用語が整ってきている。論究の上では、1991年に野島永が「貼り石方形墳丘墓」として府北部の貼石墓を取り上げ、四隅突出型墳丘墓とは異なる方形もしくは「五角形」の墳丘墓が中国地方の北半地域から京都府北部まで広範囲に広がっていると紹介している。^(注1) 筆者は、1991年「貼石墓」として丹後地域の弥生墓制の中で、方形周溝墓との関連性を述べ、2006年には山陰の「貼石墓」に対して「方形貼石墓」という差別化を図っている。^(注2)

2. 近畿北部の方形貼石墓の様相(第2・3図)

近畿北部の方形貼石墓については8遺跡13例を数える(付表1)が、様相のすべてわかる遺構はなく、各種構成要素ごとにその様相を概観したい。

(1) 立地

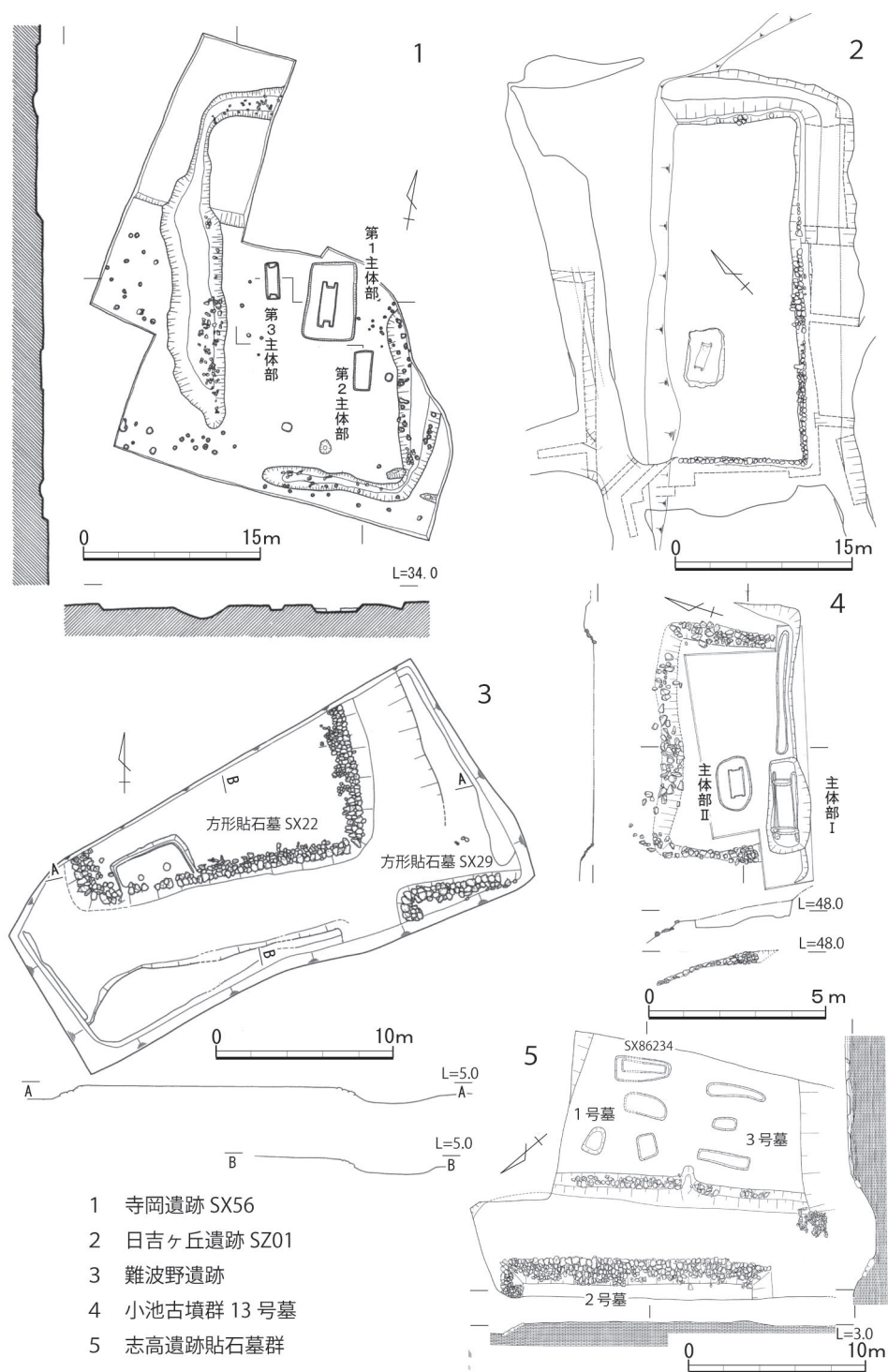
平地部と丘陵部に立地するものがある。ここでは集落(居住域)との関係に注目したい。

当該期の集落と隣接していることが明らかなのが、志高遺跡、日吉ヶ丘遺跡、寺岡遺跡である。奈具岡例は時期が不明であるが、中期と考えるならば、志高例、日吉ヶ丘例と合わせて地域の中心的な集落(拠点集落)の中に営まれた墳墓と言えよう。いずれもその墓域は居住域との間に区画溝・谷などを挟んで存在する。

集落から隔絶した丘陵上に位置するのが小池12号墓である。現状では母集落は周辺に見当たらない。

付表1 中期～後期前葉の方形貼石墓(近畿北部)

遺跡名	遺構名	立地	墳丘規模	墳丘高さ	貼石状況	貼石高さ	貼石	周溝	埋葬施設	供献土器	時期
志高遺跡	1号墓	自然堤防上	西辺6.3 m 北辺及び南辺 およそ9 m	1.1 m	北西斜面のみ	0.6 m	2段	あり	2基以上	墳丘上 溝内	中期後葉
	2号墓		東辺15.5 m 北辺2.2 m以上 南辺2.2 m以上	1.3 m	東辺、北辺あり 南辺なし	0.8 m	4段	あり	不明	なし	中期後葉?
	3号墓		5.0 m × (約9 m)	1.3 m	北西斜面のみ	0.5 m	2段	あり	3基	なし	中期後葉?
難波野遺跡	SX 22 (1号墓)	扇状地	南辺16.2 m 東辺7.8 m以上 西辺2.8 m以上	1.0 m	調査した3面あり、 北辺のみ未確認	0.6 m	4段	あり	不明	なし	中期後葉?
	SX 25(2号墓)		北辺6.0 m以上 西辺1.5 m以上	0.3～0.4 m	調査した北辺と 西辺にあり	0.3 m	2～3段	あり	不明	なし	中期後葉?
寺岡遺跡	方形周溝墓 SX 56	台地	南北3.3 m 東西2.0 m	0.9 m以上	原位置をとどめず不明	不明	不明	あり	3基	第3主体 内周溝内	中期後葉
日吉ヶ丘遺跡	SZ 01	台地	3.2 m 2.0 m	1.6 m以上	3面で確認。西辺は削 堀のため不明	0.5 m	3段	あり	1基	なし	中期中葉?
千原遺跡	グリット16	扇状地	東辺2.9 m以上 北辺3.4 m以上	0.6 m以上	1辺のみ確認	0.5 m	1～2段	あり	不明	なし	中期後葉?
	グリット27		不明	0.5 m以上	1辺のみ確認	0.5 m	1段	不明	不明	なし	不明
小池古墳群	12号墓	丘陵	不明	不明	石材が散乱			不明			中期後葉
	13号墓		長辺6.5 m 短辺3.7 m	0.4 m	丘陵側を除く3辺	0.3～ 0.4 m	3～5段	なし	2基	墳丘上	中期後葉
奈具岡遺跡	方形区画1	台地	西辺1.6 m以上 南辺6.1 m以上	0.6 m以上	検出した2辺で確認	0.6 m	2段	あり	不明	なし	不明
	方形区画2		西辺5.4 m、 南辺1.6 m	0.8 m以上	西辺のみで確認 南辺には貼石がない	0.8 m	4段	あり	不明	なし	後期前葉?
栗鹿遺跡	方形貼石墓E- SX 01	河岸段丘 (扇状地)	東西13.2 m 南北9.3 m以上	0.5 m以上	西辺と南辺の一部で確 認 東辺にはない	0.5 m	2段	あり	不明	溝内	中期後葉



第2図 中期～後期前葉の貼石墓1 (近畿北部)

貼石墓が群構成をとるものが、志高遺跡、難波野遺跡、千原遺跡、奈具岡遺跡および小池古墳群である。日吉ヶ丘遺跡と寺岡遺跡については、方形貼石墓は1基のみであるがその周辺に方形周溝墓が数基存在している。

遺存状況の悪い栗鹿遺跡のみ単独墓である可能性が残るが、概ね貼石墓は方形周溝墓などと同様に複数基から構成され墓域を形成しているといえよう。

(2) 築造時期

築造時期の明らかな墳墓は少ない。埋葬施設内から土器が出土したのは、寺岡遺跡、志高遺跡のみでいずれも中期後葉である。栗鹿遺跡、小池13号墓では墳丘上及び溝内から供献土器が出土しており、やはり中期後葉に位置づけられる。日吉ヶ丘遺跡では、環濠を利用して方形貼石墓が営まれており、層位関係から中期中葉新段階とされている。奈具岡遺跡では、周溝内から中期前葉の土器とともに後期前葉の河内産の壺形土器片が出土している。同市の大山墳墓群、古天皇古墳では後期前葉～中葉の河内産の大型壺が墳頂部及び墓壙上に供献されており、奈具岡遺跡の土器片も方形貼石墓での供献土器であった可能性は高い。

確実な時期を抑えられるものは、中期後葉に限られ、推定を含めると中期中葉から後期前葉の幅を持たせることができる。

(3) 墳丘規模

墳丘規模の明らかな墳墓は、日吉ヶ丘遺跡、寺岡遺跡、小池13号墓と3基のみである。日吉ヶ丘遺跡及び寺岡遺跡は、長辺32m前後・短辺20m前後と弥生時代中期の墳墓としては全国的には吉野ヶ里北墳丘墓に次ぐ規模である。小池13号墓は小形で長辺6.5m・短辺3.7mを測る。志高遺跡1号墓・3号墓などのように推定6m×9m規模のものもあるが、同2号墓、奈具岡遺跡方形区画2、難波野遺跡SX22などのように長辺が15mを超えるものが目立つ。当該期の方形周溝墓が一辺7～12m規模のものが多くことと比べると方形貼石墓は大型の墳丘をもつものが多いと言える。

墳形は、全形のわかる3例から概ね3：2の比率の長方形墳墓であると言える。

(4) 周溝

近畿北部の方形貼石墓の多くは周溝を持つ。周溝の類型には、日吉ヶ丘遺跡SZ01や寺岡遺跡SX56・栗鹿遺跡E-SX01などのように墳丘の周りを囲うものと、志高遺跡や難波野遺跡などのように幅広の溝を接続する他の貼石墓と共有するものがある。

日吉ヶ丘SZ01と寺岡遺跡SX56の場合は周溝部の一方を墓道状に掘り残している。志高遺跡1号墓と3号墓の間には貼石列に窪みをつけるのみで、明瞭な溝を持たないものもある。

(5) 貼石

方形貼石墓の最大の要素は貼石である。しかしながら、現状では貼石が全周していることを確認できる墳墓はない。日吉ヶ丘遺跡S Z01は一边が後世の開発により削平されており、寺岡遺跡S X56は原位置をとどめているものはない。

一方、確実に貼石を持たない辺を持つ例もある。小池13号墓は、丘陵側の一边は溝のみで貼石がない。志高遺跡1号墓と3号墓はそれぞれ、北辺と南辺に貼石がないことを確認している。志高遺跡2号墓と奈具岡遺跡方形区画2は、調査範囲内ではそれぞれ南西辺及び南辺に貼石がないことを確認している。

つまり、方形貼石墓は必ずしも全辺に貼石を持つかどうかはわからない。

貼石と墳丘基底部の関係も二様ある。志高遺跡2号墓は溝の底付近に貼石の基底部がある。1号墓は、溝の底から墳丘斜面を少し登ったところに貼石の基底部がある。すなわち、後者の場合は墳丘斜面の上部のみ貼石を施すのである。奈具岡遺跡の2例、栗鹿遺跡例などは前者で、日吉ヶ丘遺跡S Z01、寺岡遺跡S X56は後者の例になる。

貼石の石材は平たい面を持つ一边50cm前後の石材を選び、墳丘斜面に穴を穿ち、長軸を縦にして差し込むように施されているものが多い。墳丘斜面に対して平滑な面を外側にして石を貼り付けるため、貼石による広い平滑な面が構成されるのが特徴である。

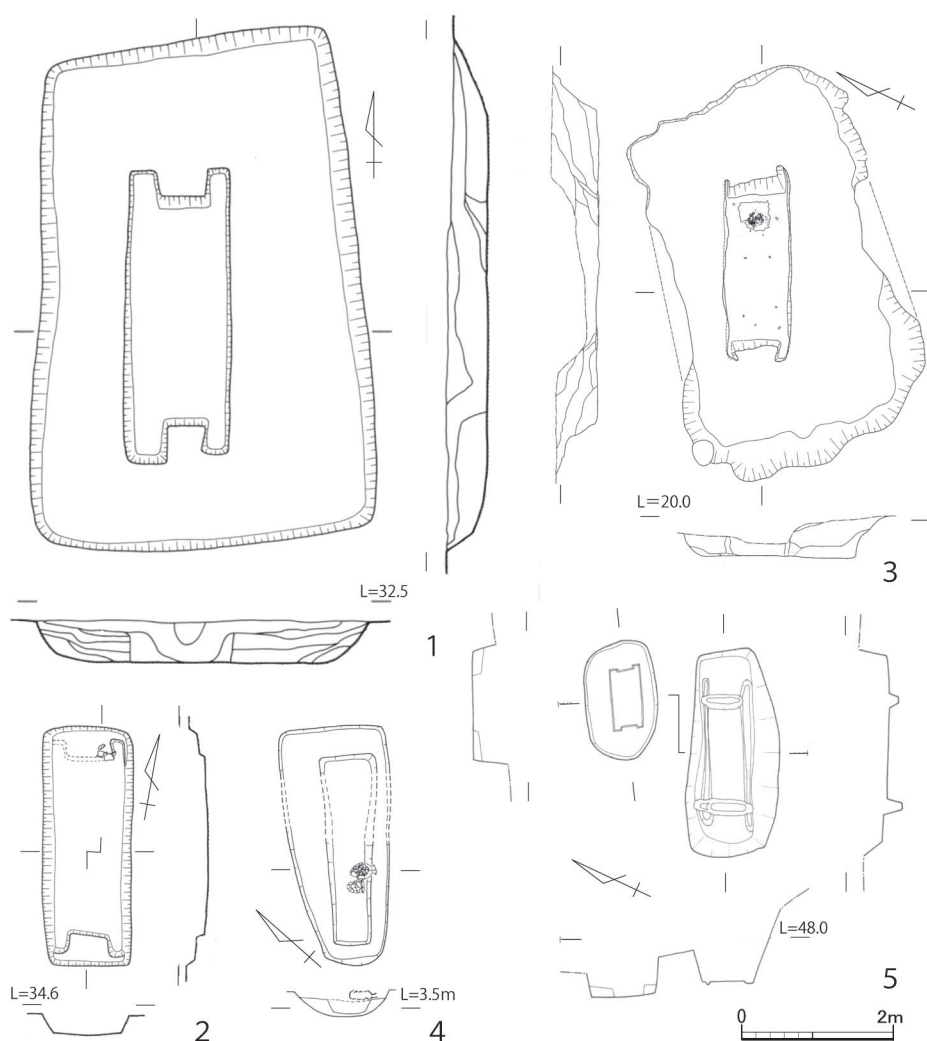
(6) 埋葬施設(第3図)

埋葬施設が検出されているのは、日吉ヶ丘遺跡S Z01、寺岡遺跡S X56、志高遺跡1・3号墓、及び小池13号墓の4遺跡にすぎない。

日吉ヶ丘遺跡S Z01では、広大な墳丘上に南側に偏って長さ5.0m・幅3.2mの大型の埋葬施設(S X01)1基のみが営まれている。内部主体は組合せ木棺で内法は長さ1.95m・幅0.75mと復元されている。S Z01の南側にある方形周溝墓S Z02は、南北長21.0m以上・東西長18.5mを測る大型の方形周溝墓である。墳丘内中央部付近の長さ3.42m・幅2.45mの墓壙内から長さ2.2m・幅0.5mの棺痕跡が確認されている。方形貼石墓と方形周溝墓の両者の埋葬施設間には大きな差は認められない。

日吉ヶ丘遺跡S Z01と墳丘規模の同じ寺岡遺跡S X56では、墳丘内から3基の埋葬施設が検出された。このうち中心埋葬施設(第1主体部)は、長辺6.7m・短辺4.2mと墓壙が大きく、その中央部に棺内法2.5mを測る組合せ式木棺が納められていた。第3主体部では、長さ3.2m・幅1.2mを測る墓壙内から棺内法1.7mを測る組合せ式木棺が検出されている。棺小口裏込め上から破碎後供献された甕が出土している。第2主体部は第3主体部とほぼ同規模であるが木棺痕跡は検出されていない。

志高遺跡1号墓では墳丘上から4基の土坑が検出されたが、木棺痕跡が検出できたのは



1 寺岡遺跡 SX56 第1主体部、2 同第3主体部 3 日吉ヶ丘遺跡 SZ01 埋葬施設、
4 志高遺跡1号墓 SX86234、5 小池13号墓埋葬施設

第3図 近畿北部の方形貼石墓の埋葬施設

S X86234のみである。S X86234は、長辺3.2m・短辺1.5～0.9mを測る墓壙内に長辺2.5m・幅0.6mの木棺を納めたものである。墓壙埋め戻し後に墓壙上に供献されたと思われる底部を穿孔する壺と甕が各1点墓壙内に落ち込んだ状態で出土している。墳丘上の他の3基の土坑のうち、埋葬施設と考えられる土坑は同規模のもう1基のみであり、残りの2基はその規模から土器供献土坑などの施設であろう。3号墓の墳丘上からも3基の土坑が検出されている。主軸がそろっていることから土壙墓と報告されている。

小池13号墓からは組合せ式木棺を納めた大小2基の埋葬施設が墳丘の西側に偏って検出されている。成人棺と思われる主体部Ⅰは長さ2.68m・幅1.0～0.8mの墓壙に内法長1.4mの組合せ式木棺を納めたものである。

以上のように大型の墳丘を持つ貼石墓には大型の墓壙を伴う傾向にある。しかしながら、内部に納められた木棺は墓壙の大小にかかわらず組合せ式木棺で、その内法も1.4m～2.5mとまだ大きな格差は生じていないと言えよう。

(7) 副葬品および供献土器

副葬品が認められるのは日吉ヶ丘遺跡S Z 01の埋葬施設のみである。碧玉製管玉が677点以上が出土した。副葬品と言うよりも被葬者の着装品と言えるものであろう。

少数派だが供献土器が墳丘上、墳丘上の土坑、墓壙内および溝内から出土している。志高遺跡1号墓では墳丘上の土坑及び溝推定位置から、一部を意図的に欠いた壺、甕、高杯が出土した。小池13号墓では墳丘上から壺が出土している。寺岡遺跡S X 56第3主体部では、後期に盛行する墓壙内破碎土器供献された甕が出土している。また周溝内からは付付無頸壺が出土している。栗鹿遺跡の溝内からもまとめて壺と甕が出土しており、供献土器の可能性がある。

3. 他地域の中期から後期前葉の貼石墓の様相

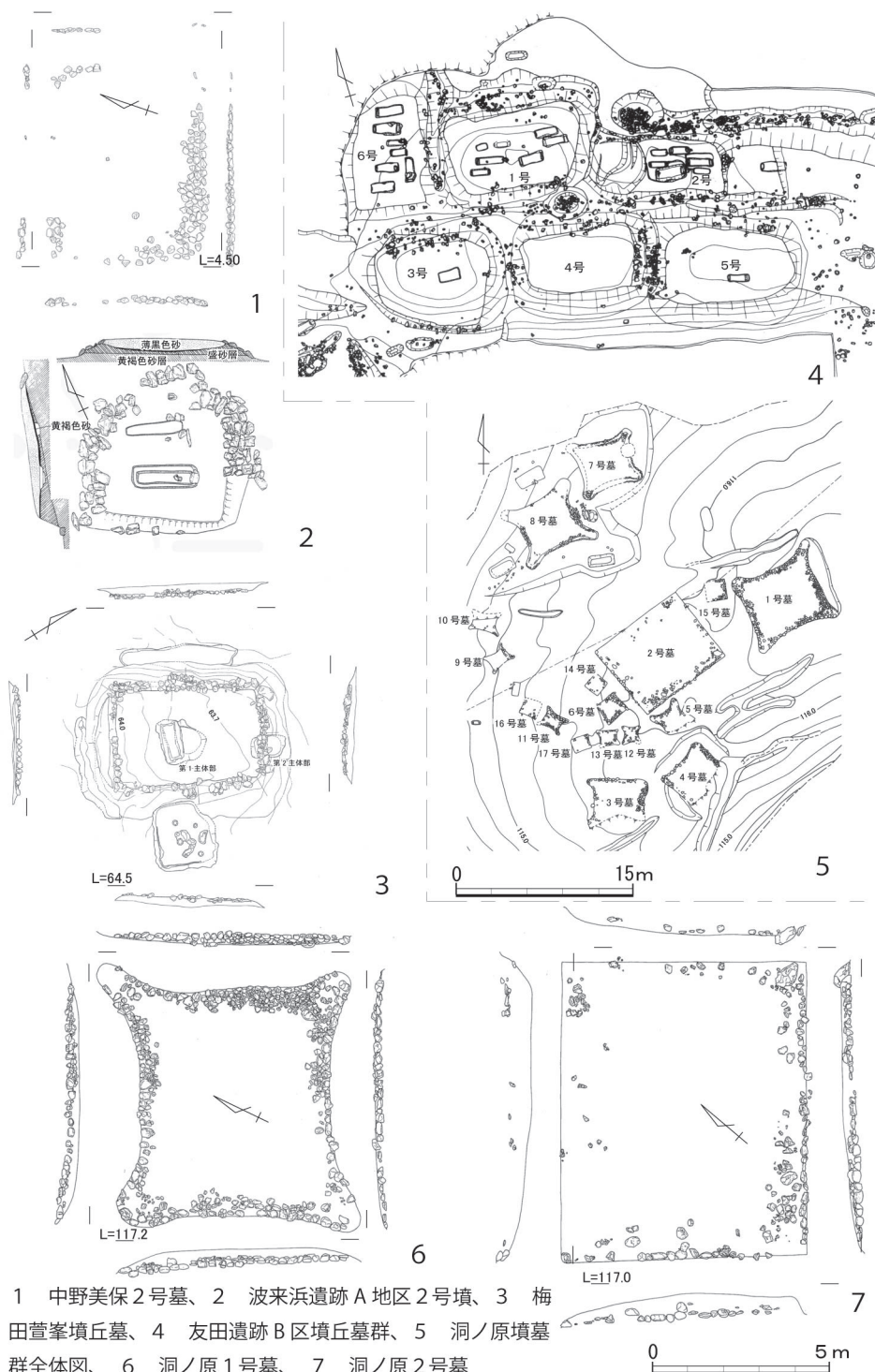
次に、近畿北部以外の中期から後期前葉にかけての貼石墓の様相について触れてみたい。第1図に示したようにその分布範囲は西は江津市波来浜遺跡から東は鳥取市新井三嶋谷墳丘墓までと広い。これらを、概ね四隅突出型墳丘墓が盛んに造られた旧国の出雲を中心とする鳥根県から鳥取県西部の地域、江ノ川上・中流域にあたる広島県北部の地域(鳥根県南部の山間部を含む)、そして鳥取県東部の3地域について概観したい。

(1) 鳥根県から鳥取県西部にかけての地域

最も古い方形貼石墓は、中期中葉とされる出雲市中野美保遺跡2号墓(第4図1)である。後期後葉の四隅突出型墳丘墓である1号墓の墳丘内から見つかった。墳丘規模は5.5×4.5mと小さく、貼石の遺存状況は悪いものの南側斜面には4～5段の貼石が行われている。

砂丘上に立地する江津市波来浜遺跡のA地区2号墳(第4図2)は、中野美保2号墓とはほぼ同規模で、四辺に貼石を持つ。墳頂部から埋葬施設3基が検出され墓壙内及び墳頂部に中期後葉の土器が供献されていた。同遺跡のB地区1号墳は、6×5m以上の低墳丘の区画墓である。貼石は1段で2辺に施され、1辺にはない。9基の埋葬施設が検出され、墳頂部から後期前葉の土器群と銅鐻が出土している。

出雲市青木遺跡では、中期後葉～後期後葉にかけての一辺10～17mを測る4基の四隅突



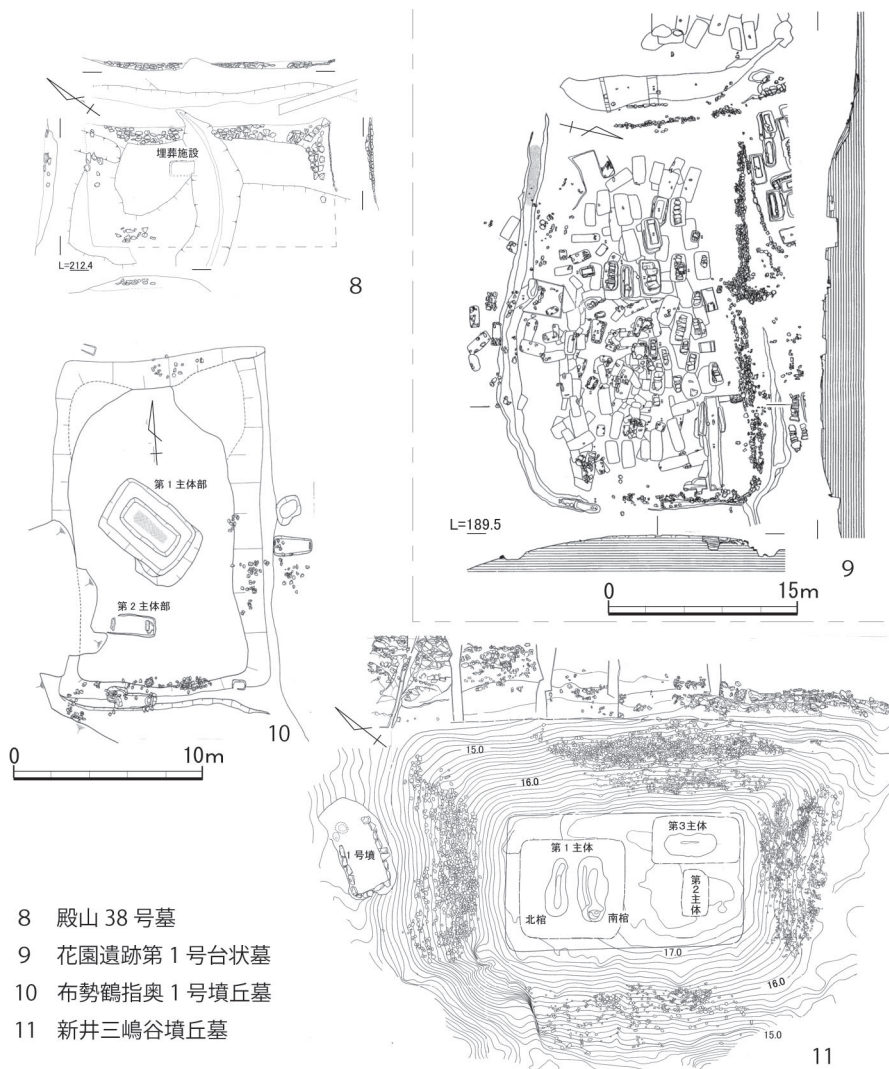
第4図 中期～後期前葉の貼石墓2（鳥根県～鳥取県西部）

出型墳丘墓を含む11基以上の貼石を持つ墓からなる墓地が検出されている。その中に後期の方形貼石墓(5号墓)が見つっている。5号墓は南北6m以上・東西7mを測り、1段の貼石を持つ低墳丘墓である。墓域内には5号墓同様に貼石を持つ小形の墳墓が数基存在する。ところで、4号墓(第6図左)は、当該地域最古の中期後葉に築かれた四隅突出型墳丘墓である。墳丘の一部のみが調査区内で検出されているにすぎないが、大型の墳丘を持つもので検出できた一辺は17mを測る。短い突出部には3枚の踏石(ステッピングストーン)がある。突出部は明瞭だが、墳丘裾には四隅突出型墳丘墓に特有の立石を持たない。貼石は傾斜角40度の急な墳丘斜面に自然石を平らな面を表側にして4～5段に貼り付けている。

松江市友田遺跡は、標高22mの低丘陵上に営まれた墳墓群である。前期末から中期にかけての土壇墓群、中期後葉の墳丘墓群、後期の四隅突出型墳丘墓が見つっている。このうち、B地区から見つかった墳丘墓群(第4図4)は、溝を共有して連接する一辺10m前後の6基の長方形墓からなる。各墳墓は墳丘高1m前後を測り、部分的に貼石を持っていたものと推定される。原位置をとどめる貼石から墳丘上半部に貼石を施したものと考えられる。埋葬施設は1基のものと6・7基のものがある。

大山北麓の妻木晩田遺跡群の中にある米子市洞ノ原墳墓群(第4図5)では、中期末の方形貼石墓である2号墓(同図7)とそれに継続する後期初頭の四隅突出型墳丘墓である1号墓(同図6)が見つっている。墳墓群最古の2号墓の墳丘規模は6.9×8.4m・高さは0.6mである。貼石は墳丘斜面上半に2辺を中心に遺存するがまばらである。墳丘裾には貼石よりも小型の礫を置いた列石(立石)が存在する。これも全周していたとは思えない状況である。四隅突出型墳丘墓導入前に立石が先行して方形貼石墓に導入されている点は重要である。当墳墓群では、後期初頭のほぼ同規模の1号墳がこれに継続する。四隅が突出した四隅突出型墳丘墓で、隅部には踏石が見られるが立石はない。以後13基の四隅突出型の墳墓が築かれるが、一辺4～5mの3・4・7・8号墓を除くといずれも一辺2m前後の小形の墳墓で、墳丘墓というより標石墓的な性格が強いように考えられる。

鳥取県大山町梅田萱峯墳丘墓(第4図3)は、大山北麓の中期後葉の遺跡密集地域の一角にあたる。住居跡群のはずれの尾根上に位置し、尾根の前面20mには独立棟持柱建物跡がある。墳丘墓は1基のみ単独で存在する。墳丘は南北11.3m・東西8.6m、高さ0.63mを測る。墳丘斜面上部にはのみ1段から3段の貼石を施す。埋葬施設は墳丘中央部と墳丘斜面上に計2基が営まれている。埋葬後、墳丘上に9本の立柱を行っている(第7図右)。その構造は一方の棟持ち柱の欠けた独立棟持柱建物であり、墳丘上になんらかの建物があったことをうかがわせる。この建物を撤去後に盛土を行い、墳丘斜面に貼石を施している。貼石は辺



- 8 殿山 38 号墓
- 9 花園遺跡第 1 号台状墓
- 10 布勢鶴指奥 1 号墳丘墓
- 11 新井三嶋谷墳丘墓

第 5 図 中期～後期前葉の貼石墓 3 (広島県北部、鳥取県東部)

ごとに様相が異なるが、平滑な面を外に向け石の長軸を縦にして設置する部分が見られ、丹後の方形貼石墓との共通性は高い。なお、墳丘中央の第 1 主体部には、長軸 2.03m の組合せ式木棺が納められていた。小口穴の位置からおおよそ棺の内法は 1.8m である。同遺跡内北方 200m の位置で同時期の木棺墓群が検出されているがほぼ同規模の埋葬施設である。

(2) 江ノ川中・上流域にあたる広島県北部の地域

江ノ川中・上流域には、三次盆地・庄原盆地を中心に中期後葉から四隅突出型墳丘墓が出現する地域である。四隅突出型墳丘墓以前の方形貼石墓の存在は不明である。

付表2 弥生時代中期～後期前葉の主要な方形貼石墓(近畿北部を除く)

遺跡名	所在地	遺構名	立地	墳丘規模	墳丘高さ	貼石状況	貼石高さ	貼石	周溝	埋葬施設	供献土器等	時期
波来浜遺跡	鳥根県 江津市	A調査区 2号墳	砂丘	南北4m、東西5m	0.9m	各辺に貼石 但し粗密あり	約0.6 m	3～4段	なし	3基	墓壇内及び 墳丘上	中期後葉
		B地区 1号墳										
中野美保遺跡	鳥根県 出雲市	2号墓	後背低 地	東西5.5m、南北4.5m	0.3m	北辺、東辺あり、 西辺なし	0.3m	1段	なし	9基	墳丘上銅鏃 共伴	後期前葉
		5号墓										
青木遺跡	鳥根県 出雲市	低地標 高3.8 m	丘陵	南北約6m以上、東西約 7m	流失	全面にはなかった可能 性大。南辺に集中	0.3m	1段	なし	不明	盛土内から 土器片	中期中葉?
		5号墓										
友田遺跡	鳥根県 松江市	B区 1号墳丘墓	丘陵	東西11m余、南北6.26 m	1.2m	原位置をとどめず。4 辺で確認	不明	不明	4辺	7基	北溝・西溝 内多数	中期後葉?
		B区 2号墳丘墓										
		B区 3号墳丘墓										
		B区 4号墳丘墓										
		B区 5号墳丘墓										
妻木晩田遺跡群 洞ノ原墳墓群	鳥取県 米子市	2号墓	丘陵	東西12.25m、南北9.25 m	0.68m	まばらに3辺あり。周 溝のない南辺のなし	不明	2段以上	3辺	不明	なし	不明
		2号墓										
梅田萱峯遺跡	鳥取県 大山町	2号墓	丘陵	東西13.15m、南北9.75 m	1.39m	北辺と西辺にあり	0.3m	2～3段	なし	不明	なし	中期後葉?
		2号墓										
花園遺跡	鳥取県 三次市	梅田萱峯 墳丘墓	丘陵	南北11.3m、東西8.6m	0.63m	4辺良好に遺存 墳丘斜面上部に巡る	0.4m	1～3段	なし	2基	墳頂部ほか	中期後葉
		第1号台状 墓										
新井三嶋谷 墳丘墓	鳥取県 鳥取市	第2号台状 墓	丘陵	東西31.3m、南北19.8 m	約1.6 m	3辺のみ確認	1.3m	3～6段	2辺	21基	なし	前期後半～ 後期前葉
		1号墳丘墓										
布勢鶴指奥墳墓 群	鳥取県 鳥取市	1号墳丘墓	丘陵	南北17.8m、東西10.6m	2.36m	南辺のみ立石。他の3 辺に貼石	1.3m	3～4段	なし	21基	なし	前期後半～ 後期前葉
		1号墳丘墓										
布勢鶴指奥墳墓 群	鳥取県 鳥取市	1号墳丘墓	丘陵	南北17.8m、東西10.6m	2.36m	四辺に円礫による貼石	約2m	-	なし	4基	墓壇上	後期初頭
		1号墳丘墓										
布勢鶴指奥墳墓 群	鳥取県 鳥取市	1号墳丘墓	丘陵	南北17.8m、東西10.6m	2.36m	ほとんどが転落してお り、不明	不明	不明	なし	2基	墓壇上	後期前葉～ 中葉
		1号墳丘墓										

三次市花園遺跡では2基の台状墓が検出されている。丘陵頂部にある第1号台状墓(第5図9)は、東西31.3m・南北19.8m・墳丘高約1.6mを測る。南側の区画のみ溝で、北側を中心に3面に貼石をもつ。墳丘内には215基の埋葬施設が確認されており、前期後葉から造墓活動が始まり、途中溝と貼石により区画され、後期前葉まで造墓活動が継続したものと推定されている。第1号台状墓の南に位置する第2号台状墓は、東西14.4m・南北9.03mを測る。第1号台状墓側のみ立石による区画で、他の3辺には貼石がある。

この地域では、中期後葉に、5基の四隅突出型墳丘墓からなる三次市陣山墳墓群、同市殿山38号墓、宗祐池西1・2号墓が営まれ、後期になると庄原市佐田谷1号墓、同佐田峠3・4号墓、同田尻山1号墓、北広島町歳ノ神3・4号墓、島根県邑南町順庵原1号墓などが相次いで築かれる。

殿山38号墓(第5図8)は、前方後円墳2基を含む殿山古墳群内にある。丘陵斜面側の遺存状況が悪いため不明な点が多いが、長さ約13m・幅約6.8m、丘陵側の周溝からの高さは0.7mを測る。墳丘の長辺と短辺の比率がほぼ2:1であるのは同時期の陣山2号墓などと共通する。中期後葉の華美な塩町式の土器が出土している。貼石以外に列石を備え、短く突出した隅部には5枚の踏石が残る。同時期の青木4号墓よりも四隅突出型墳丘墓として完成度の高い墳墓が、この地域でいち早く出現している可能性がある。

後期初頭の佐田谷1号墓は、周溝部を含めた墳丘規模は、東西19m・南北14m・高さ2.1mを測る。墳頂部から4基の埋葬施設が検出されているが、中心埋葬施設は墓壙規模で長さ3.85m・幅3.23mを測り、長さ約2.3m・幅1.1mの木槨内に長さ2.0m・幅0.6mの木棺を納めていた。隣接する佐田峠3・4号墓に比べ、墳丘規模が圧倒的に大きく、墓上での土器供献も顕著な厚葬墓である。

(3)鳥取県東部の地域

因幡の後期前葉までの貼石墓の調査例は少なく鳥取市新井三嶋谷墳丘墓と布勢鶴指奥墳丘墓の2例にすぎない。後期中葉の西桂見墳墓を大型の四隅突出型墳丘墓として捉える意見があるが、私は松井潔の意見に従い貼石墓として理解し、この地域での四隅突出型墳丘墓の導入は弥生時代終末期の糸谷1号墳に限られるものと考えている。^(注3)

新井三嶋谷墳丘墓(1号墳丘墓・第5図11)は丘陵先端部に位置し、南北26.5m・東西17m・墳丘裾部からの高さ約3mを測る。他地域の方形貼石墓に比べて墳丘が著しく高いのが特徴である。貼石はすべて拳大の円礫で、墳頂部付近を除く墳丘斜面全面に葺かれている。墳頂部平坦面は南北17m・東西11mを測る。墳丘北半部に営まれた第1主体は正方形に近い平面形で、東西約5.3m・南北約5.6mを測り、棺の陥没痕跡から2つの棺が納められたと考えられている。陥没坑内から墓壙上に破碎供献された後期初頭の土器が出土して

いる。このほか、墳丘上には2つの墓壙が営まれている。

布勢鶴指奥墳墓群は湖山池ほとりの標高20mの丘陵上に位置する。墳墓群は、1基の墳丘墓とその裾部に位置する51基の木棺墓群から構成される。1号墳丘墓(第5図10)は、南北17.8m・東西10.6mを測る。墳丘高は新井三嶋谷墳丘墓同様高く2.3mを測る。貼石はそのほとんどが崩落しており不明な点が多いが、南斜面以外は本来まばらな状況にあった可能性が高い。埋葬施設は2基で中心埋葬施設は長軸4.8m・短軸3.4mの2段墓壙で、下段に箱型の木棺を納めたと推定されている。棺は槨に覆われていた可能性があり、棺内には多量の水銀朱が敷かれていた。墳丘の構築及び貼石は墓壙構築後に行われている可能性が高い。墓壙上からは破碎供献された土器群が出土している。木棺墓群は主に墳丘裾部南側を中心に営まれており、木棺埋納後土で覆った後に石列によって幾つかの区画を形成していたようである。

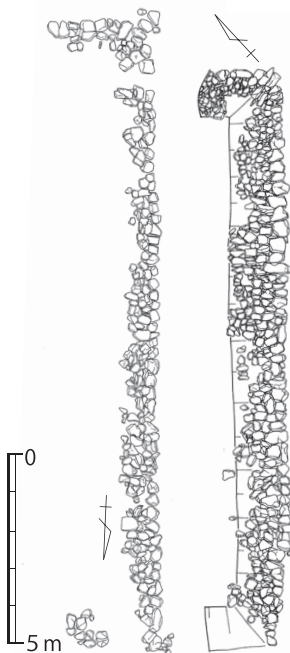
4. 方形貼石墓の共通性

近畿北部を含め4つの地域(近畿北部、島根県～鳥取県西部、広島県北部、鳥取県東部)の貼石墓について述べてきた。以下、①出現期、②貼石構造、③墳丘上の祭祀の在り方、

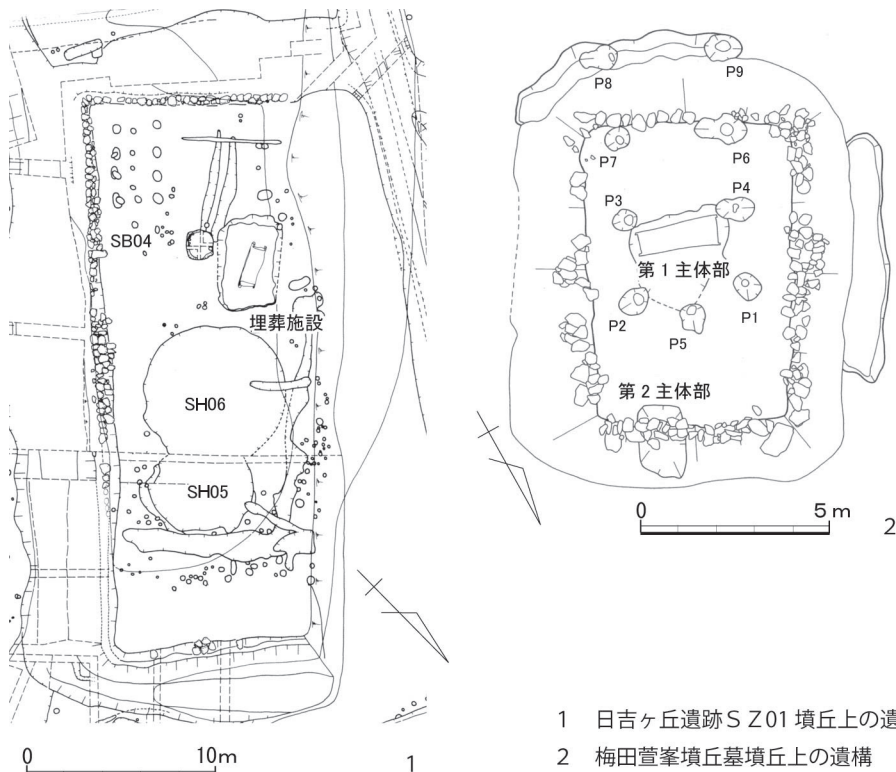
④墳丘規模、⑤変容時期の5項目について共通性を確認する。

もっとも古い貼石墓は島根県の中期中葉の中野美保2号墓である。四隅突出型墳丘墓の要素である踏石はなく、隅部は近畿北部の方形貼石墓に共通する2石を合わせた構造である。近畿北部では同時期に日吉ヶ丘遺跡S Z01が出現している可能性がある。

貼石の施工方法についても近畿北部と島根県～鳥取県西部に共通性がうかがえる。鳥取県西部の梅田萱峯墳丘墓は、基底部の貼石が、平滑な面を外に向け石の長軸を縦にして設置すること及び墳丘の上半部への施工など丹後の貼石墓との共通性が高い。第6図に示すように出現期の四隅突出型墳丘墓である青木4号墓と近畿北部の志高2号墓の貼石にも共通性がうかがえる。ともに、基底部には長軸方向に大きめの石を用いて4～5段に石を貼っている。基底部は単純な直線を描くのではなく、構造上の問題であろうか2基とも、3つの単位で緩やかな弧を描いて構築されている。



第6図 志高2号墓(右)と青木4号墓(左)の比較



第7図 墳丘内の建物

埋葬儀礼の中で役割を担った墳丘上の建物について注目したい(第7図)。近畿北部の日吉ヶ丘遺跡S Z01は、墳丘上の偏った位置に1基の埋葬施設のみを検出したと報告されているが、実は墳丘の上からは竪穴住居跡2棟(S H05・S H06)と掘立柱建物跡1棟(S B04)も検出されている。いずれも、一部が墳丘盛土に埋もれていたことから、墳丘墓築造以前のものとされている。一方鳥取県西部の梅田萱峯墳丘墓では、木棺埋納後、9本の立柱が行われ(片側のみ独立棟持柱のある建物か)、その後、墳丘および貼石の構築を行っていた。また、墳丘構造の明らかな幾つかの方形貼石墓及び四隅突出型墳丘墓では、墳丘や貼石の構築は埋葬儀礼の後に行われていることが判明している。そのような観点でみると、S Z01の墳丘上の3棟の建物跡も方形貼石墓築造以前のものではなく、関連施設と考えられるのではなかろうか。墳丘上の掘立柱建物跡S B04が、片側のみ独立棟持ち柱のある建物であることも興味深い。S Z01に隣接する方形周溝墓S Z02でも埋葬施設S X02の北側に竪穴住居跡S H03が築かれておりこれも同様に墳墓に伴う建物と考えることができよう。方形貼石墓での埋葬儀礼に当たっては、建物を使った共通する儀礼の存在がうかが

えそうである。

近畿北部にある中期中葉の日吉ヶ丘遺跡S Z01は墳丘長約32m・幅19.4~20m、中期後葉の寺岡遺跡S X56は南北33m・東西20mとほぼ同規模である。広島県北部の花園遺跡1号台状墓では東西31.8m・南北19.8mの規模で後期前葉に貼石が施工されたとされる。弥生時代中期から後期前葉において、吉野ヶ里遺跡北墳丘墓に次いで全国最大級を測るこれらの墳丘墓は祭壇としての統一規格を持っていた可能性もある。

方形貼石墓の終焉の仕方にも共通性が見て取れる。中期後葉に盛行した方形貼石墓は後期初頭になると鳥根県～鳥取県西部では四隅突出型墳丘墓に、近畿北部では後期型の台状墓に順次移行する。同じ頃、鳥取県東部では、1mほどの低墳丘墓であった方形貼石墓とは異なる墳丘高2~3mの方形貼石墓が誕生しているのではなかろうか。

5. おわりに

弥生時代中期に近畿北部で盛行する方形貼石墓は、広く西日本に分布する貼石墓と共通性が高いことを明らかにした。以下、列記してまとめに代えたい。

(1) 方形貼石墓は中期中葉に西日本の日本海側にあたる近畿北部と鳥根県～鳥取県西部の地域で出現している可能性が高い。貼石の用い方、墳丘の構築方法など両地域の共通性は高い。四隅突出型墳丘墓が盛行する広島県北部や中間地域である鳥取県西部では中期段階のものは見つかっていない。

鳥根県や広島県北部では前期から続く継続的な墓地の中に方形貼石墓が出現している例がある。これらの古い墓地の中には前期の標石墓(配石墓)があることから同様の墓制の確認されている朝鮮半島に起源を求める意見もあるが現状では不明な点が多い。

(2) 方形貼石墓の平面形は概ね長方形である。墳丘規模は、5m×7mの小さなものから30×20mの当該期の墳墓としては全国最大級を測るものまでである。後者には同規格のものが地域を越えて3基あり、墳丘規格が存在する可能性がある。

なお、方形貼石墓のあり方を考えると、墳丘の大きさや墓壙の大きさは葬送儀礼の大きさを反映するものであり、被葬者個人の権力性・富裕性を示す段階ではないように考える。

(3) 貼石は墳丘の荘厳化を目的に行っていると考えられるが、必ずしも四辺全面に行っているとは限らない。また、墳丘斜面全面に貼石を行うものと墳丘上半部のみに行うものがある。

(4) 貼石は埋葬後に墳丘盛土を行ったのちに施工される例がある。梅田萱峯墳丘墓では、埋葬→建物を使った儀礼→貼石盛土による墳丘の完成が明らかになっている。日吉ヶ丘遺跡も同様な事例の可能性があり、方形貼石墓の荘厳な墳丘=祭壇としての葬送儀礼の場と

いう役割を考えてもよいのかも知れない。墳丘を埋葬儀礼に伴う祭壇として利用する例は、立柱を行う京丹後市赤坂今井墳墓(後期末)、出雲市西谷3号墓(後期後葉)など当該地域の後期後葉以降の大形墳丘墓に認められ、それらとの関連性は無視できない。

(5) 中期後葉～後期初頭にかけて新たな墓制として近畿北部型弥生時代後期墓制や四隅突出型墳丘墓による墓制が、中期の方形貼石墓の墓制と入れ替わる。その後、墳丘内部の埋葬施設が、大型化したり槨構造を持つものが出現したり、副葬品を持つものが増えるなど被葬者を手厚く葬ようになる。この段階で被葬者個人の権力性・富裕性が示される。墳丘祭祀＝集落としての祭祀から埋葬儀礼の祭祀＝首長祭祀へと変容する中で方形貼石墓が新たな墓制へと交代するのであろう。同じ時期、鳥取県東部においては、高塚としての方形貼石墓が出現するようであり、これも同様の現象の一つとして捉えられよう。後期前葉から後葉にかけて、吉備や越など列島的に同じような現象が起り、所謂「王墓」が各地に誕生すると考えられる。

1986年の志高遺跡での方形貼石墓の発見から24年の月日が経過した。古墳時代前期の包含層の下から1号墓の石列が見つかったものの全く性格がわからず、悩んでいたところ当時の課長補佐であった杉原和雄氏から墓であることも想定して慎重に下げて行きなさいと指導を受け、その後の2号墓の貼石および1号墓埋葬施設の発見につながった。また、貼石墓発見後には、センターの理事であった佐原真先生をはじめ近藤義郎先生、森浩一先生、石野博信先生、都出比呂志先生、渡辺誠先生など当時の学界の第一人者に懇切丁寧に現地指導をしていただき、こころ震える気持ちだったのを覚えている。加えて、島根県の西尾克己さん、広島県の桑原隆博さん妹尾周三さんから多くの資料を送付いただいた。1988年の考古学研究会の総会では、近藤先生が「丹後の弥生時代中期の墳墓から全長4m近い木棺が検出されたとの報告を聞いたがそんなことはありえない」と発言された。寺岡遺跡SX56の第1主体部の棺側版の長さが3.85mあったので「4m規模の木棺」と報道されたのが原因であり、内法は2mほどであるという大事な情報が伝わっていなかったことを痛感した。さまざまな想いのある「貼石墓」である。

「志高遺跡の貼石墓」は、大学4回生の時に携わった帯城墳墓群の調査とともに私に生涯の研究課題を与えてくれたが、長らく文章にまとめることができなかった。今回30周年という節目に長年の宿題を果たそうと取り組んだが、不十分な内容に終わってしまった。今後もこつこつと弥生時代の社会に関する研究を続けていきたい。

(ひご・ひろゆき＝当調査研究センター調査第1・2課課長)

京都府埋蔵文化財論集 第6集

- 注1 野島永「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991
- 注2 肥後弘幸「引き継がれた墓制－近畿北部型弥生時代後期墓制前史－」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注3 松井潔「山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期」(『考古学と遺跡の保護－甘粕健先生退官記念論集－』甘粕健先生退官記念論集刊行会)1996

参考文献

- 平安博物館編『小池古墳群 大宮町文化財調査報告』第3集 大宮町教育委員会 1984
- 『奈良岡遺跡第3次発掘調査報告書 弥栄町文化財調査報告』第4集 弥栄町教育委員会 1986
- 『寺岡遺跡 野田川町文化財調査報告』第2集 野田川町教育委員会 1988
- 『志高遺跡 京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 「千原遺跡第3次」(『岩滝町文化財調査報告』第11集 岩滝町教育委員会)1988
- 『日吉ヶ丘遺跡 加悦町文化財調査報告』第33集 加悦町教育委員会 2005
- 「難波野条里制遺跡・難波野遺跡 平成17年度発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第121冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2007
- 「粟鹿遺跡」(『兵庫県文化財調査報告』第323冊 兵庫県教育委員会)2007
- 『青木遺跡Ⅱ(弥生～平安時代編)』鳥根県教育委員会 2006
- 『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会 1983
- 『妻木晩田遺跡洞ノ原地区・晩田古墳群発掘調査報告書 淀江町埋蔵文化財調査報告書』第50集 淀江町教育委員会 2000
- 「梅田萱峯遺跡」Ⅴ 鳥取県埋蔵文化財センター・国土交通省倉吉河川国道事務所 2009
- 『史跡花園遺跡－調査と整備－』・『史跡花園遺跡－第二次調査と整備－』三次市教育委員会 1979・1980
- 「大伴・上淀・殿山」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』第57集 1987
- 「佐田谷墳墓群」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』第63集 1987
- 「佐田峠墳墓群(第3次)の調査」『広島大学大学院文学研究科帝釈遺跡群発掘調査年報 XXIV 広島大学考古学研究室紀要』第2号 広島大学大学院文学研究科 2010
- 『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書 岩美町文化財調査報告書』第22集 岩美町教育委員会 2001
- 「東柱見遺跡、布勢鶴指奥墳墓群」『鳥取県教育文化財団調査報告書』29 財団法人鳥取県教育財団 1992
- 『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター 2007